

田中 伊佐生

1. 事業実施の目的

博士論文執筆に係る本調査に向けた予備調査の実施、現地ネットワークの構築

2. 実施場所

湖南省湘西土家族苗族自治州の龍山県と瀘溪県

3. 実施期日

平成 30 年 12 月 29 日（土）から平成 31 年 1 月 5 日（土）

4. 成果報告

●事業の概要

中国湖南省湘西土家族苗族自治州の龍山県と瀘溪県において、土家語に関する本調査に向けた予備調査と、今後の調査を円滑に進めるためのネットワークづくりを行った。調査の目的は、龍山県と瀘溪県における土家語の使用状況を把握すること、本調査の具体的な立案に資する土家語データを収集することである。

今回の調査においては、龍山県では A と B の 2 地区、瀘溪県では C 地区に居住している土家語使用者 15 人を対象に、言語使用状況に関して聞き取りを行うとともに土家語データを収集した。その結果は以下のとおりである。

1. 言語使用状況の調査概要

1.1 龍山県の状況

①年齢層別に見た土家語の使用状況

A 地区においては、60 代以上では大半の人が土家語を使用でき、50 代、40 代では、土家語を使用できる人の割合が多く、30 代以下では年齢が下がるにつれて土家語を使用できる人は減少していく。B 地区においては、土家語を使用できる人は 60 代以上の人にほぼ限定され、50 代以下で土家語を使用できる人はわずかである。このように、A 地区と B 地区では土家語の年齢層別の使用状況に違いが見られた。

②使用する言語の種類

A 地区と B 地区ともに、土家語使用者の全員が土家語と漢語の二言語使用者であり、会話の相手によって使用する言語を使い分けていることが分かった。例えば、60 代の土家語使用者は、配偶者とは土家語で話し、孫とは漢語で話す状況となっていた。

1.2 瀘溪県 C 地区の状況

①年齢層別に見た土家語の使用状況

C 地区では、すべての住民が土家語を使用でき、住民同士の日常会話は、基本的に土家

語で行われていた。

②使用する言語の種類

C 地区の住民は、土家語、漢語、苗語の三言語を使用していた。例えば、C 地区の住民と報告者とは、漢語で会話をしていたが、住民同士は土家語で会話をしていた。C 地区の近辺には、苗族集住地区があり、その地区の住民との会話では苗語を使用するとのことであった。

1.3 生産年齢人口に属する世代の言語使用の状況

A、B、C の 3 地区ともに、生産年齢人口に属する世代の多くは都市部に移住するか出稼ぎに行っており、都市部での生活では専ら漢語を使用しているとのことであった。一方で、A 地区と B 地区の出身者は、帰省時に土家語を使用しない傾向があるのに対し、C 地区の出身者は、帰省時には、土家語を使用するとのことであった。

2. 土家語データの収集

A、B、C の 3 地区で、動植物に関する名詞、人称代名詞、数詞、動詞などのうち基本的な語彙の収集を行った。その結果、A 地区と B 地区では共通する語彙は多いが、A 地区に比べて B 地区で使用される語彙には漢語からの借用語が多く含まれていた。C 地区で使用される語彙は、A と B の 2 地区の語彙との違いが大きいことがわかった。

●本事業の実施によって得られた成果

今回の調査では、龍山県の 2 地区と瀘溪県の 1 地区において、言語使用状況に関する聞き取りと、土家語の基本的な語彙データの収集を行うことができた。その結果、3 地区の言語使用状況および 3 地区で使用される土家語の語彙について、それぞれ相違点と共通点を見出すことができた。主に音声や語彙の面で地域的な違いがあるとされる土家語に関しては、使用地域ごとに研究が行われてきた。これらの先行研究と対比しつつ、今回の調査で得られた内容を詳細に分析することにより、土家語の構造を体系的に明らかにする記述言語学的研究を基盤とした計画立案が見込める。また、本事業の実施によって、3 地区すべてにおいて、今後の調査やデータ収集の協力者とのネットワークを構築することもできた。

●本事業について

本事業の実施により、本調査の具体的な立案の見通しを得ることができ、かつ湘西土家族苗族自治州で本調査を行うための協力関係も構築することができた。

本事業は、博士課程の研究に必要な調査やデータ収集の機会のみならず、調査の協力関係構築を促進する機会を提供する点において極めて有益なものと実感している。今後も、本事業が継続されることを切に希望する。